

教育研究集会2012

教育のつどい IN 兵庫



発行所
高松市田村町1033-3
TEL(087)867-4797
FAX(087)867-6446
香川県教職員組合
定価 1部50円 1月100円
組合員の購読料は組合費に含む

香教組ホームページ
<http://www.niji.or.jp/home/kakyoso/homepage>

香川県教育研究集会

日時
10月28日(日)
9:30~15:15
場所
香川大学
記念講演
堤未果さん



神戸国際会館で開かれた全体会

初日の開会全体会は、阪神淡路大震災復興のシンボルである神戸国際会館で行われ、兵庫商業高校吹奏楽部の演奏で幕が開きました。反原発を訴えている高校生タレントの藤波心さんのオープニングトークに続いて、脚本家で、連続テレビ小説「カーネーション」の作者である渡辺あやさんの講演が行われました。昨年10月の滋賀県大津市における中学2年生の自殺事件にかかわって、開会全体集会の代表委員あいさつと討論の呼びかけに応じて、多くの分科会や教育フォーラムで真摯な討論が行わ

8月17日から3日間、神戸市を中心として、「教育のつどい2012」が開催されました。北海道から沖縄まで、子ども、保護者、教職員が7000人以上参加し、7つのフォーラム、29の分科会で熱い討論と交流が行われました。香教組からは、5人のレポーターと3人の傍聴者が参加しました。

初日の開会全体会には、実行委員会による「子どもたちのいのちを

教育のつどい2012 アピール(抜粋)

昨年10月の滋賀県大津市における中学2年生の自殺事件。子どもたちのいのちが何よりも大切にされなければならない学校で、なぜこのようなことが起きてしまったのか、「教育のつどい2012」では開会全体集会の代表委員挨拶と討論の呼びかけをふまえて、多くの分科会や教育フォーラムで真摯な討論と交流が行われました。その中で語られ、共感的に受け止められたのは、次のような点でした。

「いじめ」を、暴力や人権侵害の問題としてとらえること、教職員が、子どもたちのいのちと人権を守ることを何よりも大切に感じる感覚をときずまずこと、それはいじめられている子どもに対してだけでなく、いじめている子どもにも同様であること、子どもの中にこそ解決の力があり、それを引き出すことが大切なこと。さらに、保護者、教職員が敵対関係に陥るのではなく、ともに力を合わせた学校づくり、地域づくりが求められていること。そして、「競争と管理」「自己責任」を基調とした新自由主義的な「教育改革」が子どもたちばかりでなく、親や教職員など子どもに関わる人々に多大なストレスを与え続けており、この抜本的な改善なくしては根本的な解決は難しいことでした。こうした討論をふまえて、それぞれの地域でさらに議論を深めていくことが切実に求められています。

「教育のつどい2012」は、原発・震災にかかわって、フォーラムでの討論とともに、19の分科会に50本を超えるレポートが出され、具体的な教育実践やとりくみについて旺盛に議論を行いました。

教育目標まで首長が決めるなど、橋下・大阪「維新の会」による教育へのあからさまな介入や、戦後民主教育と民主主義を根本から否定する動きについても、フォーラムや分科会の中で報告と討論が行われました。

再稼働に反対し、官邸前行動、国会包囲、原発ゼロ集会などに、10万人、20万人の人々が全国から集まり、全国各地で多彩な集会在催されています。未来を生きる子どもたちのいのちを守りたいという声、いのちを最優先する政治を求める共同が、歴史を動かす大きなうねりとなり、その中に子どもと教育を守り支える力があることを私たちは改めて確認しました。

全国からご参加いただいたすべてのみなさん、子どもたちと教育の未来に心を寄せるすべてのみなさん。今こそ、子どもたちのいのちを慈しみ、人間として大切に作る学校・地域を創るために、力を合わせましょう。



高校生タレント藤波心さん

慈しみ、人間として大切に作る学校・地域・社会を創るために力を合わせましょう！父母・国民、教職員のみならず、教育のつどい2012アピールを発表しました。

参加者の感想

選択と集中

私が参加した、分科会「今日の教育改革 その焦点と課題」では、「小中一貫教育」・「高校再編」・「PTA活動」・「教職員の配置状況」・「教職員の人事評価」等、多岐にわたる問題が報告された。分科会を担当する共同研究者は、一見多岐にわたるような問題の本質について以下のように述べた。
「規制緩和により、自己責任の競争をさせること。選択と集中」
(裏面に続く)

小黑板

昨年あまりの膝痛に二度と行くものかと思つた富士山へまた行つてしまった。山小屋の足下に転がる紙くずやたばこの吸い殻を見て、後輩のことはを思い出した。それは初めて富士山に登り、記念に石ころ一つ持ち帰ろうとしたとき「みんなが同じように石ころ一つ持ち帰ったらどうなるか」と戒められたことばだ。一つぐらゐの石ころ、一つぐらゐのゴミ、ちよつとならいいのではないかと気が持ちは同じ。逆にみんながちよつとずつゴミを拾つて帰れば・・・と思つたが行動には移せなかつた。

ちよつと

今、脱原発の声が日本中であがっている。一人一人の良心が集まり、政治家も放つておけない状況になっている。ヒューマンパワー恐るべしである。組合も同じ集まれば元気。教職員の職場では、どうも集まれないよう、力を発揮できないようにしているのではないか。話もできないくらい忙しい。差別ボーナスで競争させ、みんなで協力してき教育のとりくみを分断してしまつた。勤務時間におしゃべりをしていたら、注意されたとする話も聞く。黙々とパソコンに向かうだけが仕事ではない。ちよつとから変えていきましよう。

つまりはエリートを選別しそこに資源(お金)を集中することである。これらは2005年の中教審から始まったものである。すくとんと合点がいった。今回私が提出したレポート「F先生の支援を通して見えてきた香川県の本質も、正に「選択と集中」そのものであったからである。別の分科会からわざわざ駆けつけてきてくれた埼玉県教職員組合のレポート「もう一度人事評価に向き合うとき」からも、今後の取り組みに学ぶものが多くたくさんヒントを直接得ることができた。西宮教職員組合からは、「兵庫(西宮)における教職員人事評価・育成システムの取り組み」が報告された。

「クラスの中にじつとできない生徒がいる。授業中通りかかった校長が、別の生徒に『あの子は、いつもあんな風なのか。』と聞いていたのを見た時、その生徒に『おまえ、なんでじつとしておられへんのや。』と感じてしまった自分がつらい。今まで進んで問題のある生徒を引き受け、頑張って指導してきたことが誇りであったのに。」

多くのレポートから、「教師の仕事は点だけで評価できない。全体像を見なければならぬ。それは短い時間では評価できない。」ということを再認識した。教師の尊厳を踏みにじる「給与差別支給制度」撤廃するまで、教職員全員で力を合わせなければこの思いを強くした三日間であった。

(太田中学校 入倉健乗)

3日間、教育のことだけでなく、様々な分野でたくさんの方と学びました。レポートのみなさんの分科会をまわり、同じ話題でも様々な切り口があり、一つのことを追求していくことも大切ですが、多角的に見ることの大切さを改めて実感しました。自分の知らなさに気づき、「正しく知って、正しく理解し、正しく伝える」という、私の信条を振り返り、これのもつ意味、自分がこれからできることをじっくり考えた3日間でした。

(高・中央小 濱田里美)

障害児教育の分科会は、28分科会の中でレポート数が42本と一番多かったです。私の小分科会では障害の重い子ども教育について実践を交流し合った。全国から集まった約30人は2日間で全員発言したと思う。一人一人がしっかりと意見をもち、感心するばかりだった。やはり実践を持ち寄り話をすることは有意義であると思った。機会があればまたレポートと共に参加したい。

(東部養護 岡がおり)

今回はレポーターとして理科教育分科会で「エネルギー・原子力教育のための支援事業」の実態について発表しました。ここ10年ほどでエネルギー・原子力教育のための支援事業がさかんに行われてきました。原子力セミナー、原子力発電所の見学会、電力会社によるエネルギー教育出前授業、エネルギー・原子力教育に使用する教材の購入、原子力教育のためのパンフレッ

トとワークシート「わくわく原子力ランド」の配布等々です。多くの事業が私たちの知らない間に拡充されています。しかも、これらの事業が現場で歓迎さえされていること、3・11の



震災後もこれらの事業がますます意義のあるものとして継続されていること、新たに「放射線について考えてみよう」というパンフレットが各校に配布され、「放射線はそれほど危ないものではない」かのように思わせよ

うとしていること等、レポートをまとめていく中で、これは知らないでは済まされない。我々がこの流れに歯止めをかけなければならぬと強く感じました。

(栗林小・櫛橋秀晃)

寄宿舎指導員の正規採用を

9月3日、香教組・高教組 実施し、退職者の補充は、正は、県教委に県内外から集めた寄宿舎署名6127筆(9/3現在)を県教委に提出し、次の4つの要求を出しました。

1. 全ての寄宿舎に、男性指導員を複数配置すること。

2. 寄宿舎指導員の定数配置に

3. ついては、最低保障を厳守す

4. 寄宿舎指導員の採用を必ず



署名を提出する海原寄宿舎指導員

私たちの長年の要求がさらに実現 2017年度までの5年間で 小中学校全学年で35人学級 文科省が定数改善計画案発表

文部科学省は、9月7日、2013年度から17年度までの5年間で小中学校の全学年で35人以下学級を実現するため、教職員を増やす定数改善計画案を発表しました。

5年間の増員総数は2万7800人で、このうち1万9800人を35人以下学級の推進に、8千人をいじめ問題などの教育課題の対応に充てます。

初年度の増員数は5500人で、13年度予算の概算要求に必要額119億円を盛り込んでいます。計画では14年度以降も毎年5500人程度増やします。35人以下学級は既に小1と小2で導入されていますが、今後はどの学年から実施していくかは各都道府県が選べるようにします。

文科省は、財政負担を抑えるため、増員の財源に、少子化による児童・生徒の減少に伴う教職員定数の自然減分や、教職員の若返りによる給与費の減少分を充てるとしています。

香教組海原寄宿舎指導員は、「私も含めて4名が今年度退職する。寄宿舎指導員の仕事は、経験が必要だ。1年限りの非常勤ではできない。寄宿舎指導を継続するために、早く公募してほしい」と訴えました。

それに対し、県教委は、「伺ったことは、伝えます。4人の退職の補充は何らかの形で行います」と回答しました。

海原寄宿舎指導員は、「公募予定していませんとの回答を期待していたのに、答えが聞けず残念」と言っていました。

寄宿舎署名6127筆提出